居博士の論證せられたところであつて、この點からも兩者の同一を認むるに差支ない。併しながら蒙古語で普通囊槖＝今日革袋でも布袋でも＝を呼ぶには ughuta (oghuta) といふ語がある。明本（柯劭忞博士藏本、大英博物館所藏本等）の華夷譯語にはこの蒙古字の外に漢字で「呼呼塔」と記してある。即ち hughuta であるが、頭音の h は近代蒙古語では脱落して居るのである。別本華夷譯語（紅葉山文庫舊藏本の如き）には別に布袋に對して「忽塔」といふ文字が配してあるが、それは hughuta の轉じた hūta に相違ない (J. A. avril-juin, 1925. p. 226 參照)。渾脱はこの語形に相當すると考へた方が一層適切であらう。尤も budung も hughuta も huta も同一語原に出た相異つた形の傳はつたものと思ふが、今はその論證に入ることを見合はせる。ughuta といふ語は ughu,「即ち空虛（ウッロ）にする」とか、「穴を掘る」とか、「凹める」とかいふ語（コヴレウスキー及びシユミット蒙古辭典參照）から起つたものと思ふ。何れにしても渾脱が蒙古語或はその類族語であり、遲くも唐代以後、動物の骨肉を空去し、皮を形の儘に殘した空虛の囊狀のものを呼んだものであり、同時に一般に囊槖をもかく稱したことは疑を容れない。從つて渾脱舞といふのは一種の渾脱を帽子として被つて舞うたのに因んで起つた名と思はれる。

以上述べたところにして認められるならば、舞樂の渾脱を以て林邑樂とする所傳は信じ難く、北人の間に起原を有するか、もしくは北人所有の渾脱を用ゐて唐で工夫せられたものと見なければならぬ。

因みにいふ。渾脱舞の名稱について一小篇を綴つたからには當然これと關聯する蘇莫遮といふ舞樂の名についても解釋を施さねばならぬが、今或る事情の爲にそれに論及する時間を有しないのを遺憾として筆を擱かねばならぬ。

（市村博士古稀記念東洋史論叢、昭和八年八月）